

## 〔学会印象記〕

### 第10回国際視覚障害者教育会議 (10th ICEVI)

10th International Council for Education of People with Visual Impairment (第10回国際視覚障害者教育会議)が1997年8月3日から8日までサンパウロで開かれた。この会議は、1952年に第1回大会がオランダで開かれて以来、5年ごとに世界各地で開催されている。我が国の一部の関係者は、本会議の活動を知っていたが、積極的に関係を深めようという動きは見られなかった。しかし、前回のバンコック大会で研究発表をした筑波短期大学の黒川哲宇教授が関係諸機関や個人へ積極的に働き掛け、その会議の内容やその目的、意義が関係者に伝わりはじめると、本国際会議への関心は高まってきた。黒川教授の呼び掛けに対して、11名が参加することになった。筑波技術短期大学から8名、筑波大学附属盲学校から2名、それに筆者であった。

本会議のテーマは、Stepping Forward Together : Families and Professionals as Partners in Achieving Education for Allであった。このテーマの通り、会期中の発表や講演はこの趣旨に沿った内容が連なっていた。例えば、英国のDr. Ennalsは、How effective are educators as partners in preparing children for life?というテーマで講演を行った。視覚障害児の発達を援助するパートナーとしての教育者の役割について、ユーモアを交えて語ってくれた。また、本会議の主催者であり、視覚障害者の娘をもつ Siaulys 氏は、What barriers prevent parents and educators from entering into a full partnership in the educational process?という演題で、ブラジルにおける視覚障害教育の問題点を指摘し、教育制度の改革を訴えていた。ブラジルの教師の待遇は、低く押さえられており、不十分であると Siaulys 氏は怒りをにじませ、特殊教育の整備を訴えていた。この講演後に、地元の人からブラジルには盲学校がないことをおしえられた。私達の目は欧米の進んだ教育制度に向きがちだが、開発途上国の教育の現状についても理解すべきであることを再認識した。

口頭発表で、黒川教授が Which hand is better for reading braille in the adventitiously blind?について、長岡助教授(筑波技術短期大学)が Work environment of blind computer specialists in Japan について研究を発表した。それぞれが核心を突いた発表で、フロア

から質問が寄せられた。その適切な受け答えに、お二人の周到な準備が見て取れた。その他の発表として、弱視者の読み、補助具の開発、統合教育、親子関係、言語発達、幼児期の指導などがあった。特に興味があった歩行補助具としての感覚代行機器に関する2題の研究発表を聞いた。英国と米国の発表で最新の感覚代行機器の開発が紹介された。英国からは Mobic System の開発状況、米国からは GPS System の有効性が発表された。いずれも盲人に位置を知らせ、単独歩行を可能にする装置の説明とその評価についての発表であった。GPS については、我が国でも実験されているが、Mobic System については初耳であった。その発表者に論文を送ってもらうようお願いしたところ、9月に資料や論文が届いた。

ポスター発表では、牟田口辰己氏(筑波大学附属盲学校)が Development of braille reading speed in blind children について、松澤 正教授(筑波技術短期大学)が The circumstances and problems in the work place of physical therapists with visual impairment in Japan について発表した。牟田口氏の点字読みの発達に関する研究は、関心を集め、多くの質問を受けた。米国の研究者にポスターの英語に誤りはないかと尋ねたところ、まったく問題はないので、是非英語で論文を書いてほしいと励まされた。牟田口氏の苦勞は報われ、自信を深めることになった。松澤教授の発表にも日本の盲教育の実情を知りたい人達が訪れ、その説明を聞きながら我が国独自の理療科教育制度に感心していた。加藤助教授(筑波技術短期大学)は、Graphics and alternatives for the visually impaired from college-level science education and entrance examinations in Japan について発表した。コンピュータを用いた点訳技術や触図の作成方法についての質問が寄せられた。ポスター発表は、発表者と質問者の間の垣根を低くし、相互理解を促進させる効果があった。今回日本から発表された5題の研究は、高い水準にあり、諸外国の研究と比べて遜色のない内容であった。

本会議では、地域の活動も重視されている。世界を8つの地域に分け、それぞれから地域代表を出すことになった。アジア地域に集まった国は、日本、中国、香港、台湾、フィリピン、インド、マレーシアであっ

た。日本代表として黒川教授が選ばれ、各国の状況をまとめてニューズレターで紹介することが決まった。このミーティングをきっかけにしてアジア地域の連携が深まっていくことを期待したい。今回は、2002年にオランダで開催の予定である。

会議の合間に、黒川教授の案内で伯国鬼木東洋医療専門学校の鬼木市次郎理事長（85歳）にお会いした。私財を投じて、サンパウロに学校を設立した鬼木理事

長の波乱の人生は、私達の胸を打った。設立の動機、ブラジルにおける障害者処遇の現状、日系日本人社会で生まれ、育った障害者の社会参加の状況、卒業生の活躍などを拝聴した。ここまで鬼木夫妻を駆り立てたものは何なのか、いまだに自問している。

（筑波大学心身障害学系 中田英雄）

## 日本発達心理学会第8回大会（大阪大学）

1997年3月27-29日まで、千里中央にある、大阪大学の真新しいコンベンションセンターと人間科学部を会場に第8回大会が開かれた。日本発達心理学会は、発足してから10年に満たない若い学会であり、ご存じのない方も多いと思われるので、本学会の紹介も兼ねて報告したい。

本学会は、発足後、まだ日は浅いが、会員は2000人を越えており、また、独自の「開かれた学会」という方針を持ち活動を行っている。

まず、発達心理学を研究したい人は誰でも会員になれる。入会に際して推薦者は不要で、学歴も、業績も必要なく、いわゆる学者だけでなく、研究的な姿勢で人々と接する保育者、教育者、臨床家、実務者も歓迎されている。おそらく、30%前後がそのような職種の方々であろう。また、30、40代の若手が多く、女性が会員の半数を超えているそうである。役員や編集委員にも女性が多い。

また、発達心理学という乳幼児を思い浮かべるかもしれないが、むしろ、「生涯発達心理学会」とでもいった方がいい。発表論文や投稿論文をみると、乳幼児から、児童、青年、成人、老人まで幅広い年齢層を対象としている。

そして、学会員の構成からもわかるように健全と障害といった区別なく、人間の発達の諸段階における様々な臨床的な問題を研究対象としてゆこうという方向を持っている。また、従来の発達心理学者のみでなく、障害児教育、リハビリテーション、霊長類研究、行動分析学に関連した人々の参加が多いのも特徴であろう。

年に一回の大会と年3号発刊の「発達心理学研究」の活動の他に、経常的に会員による様々な自主的な活動が行われているのも特徴である。

まず、会員が自発的に集まって組織した、8つの専

門分野別の分科会が、それぞれ独自の活動を繰り広げている。現在、比較認知発達分科会、道徳性・向社会性分科会、文化比較・国際比較分科会、老年発達研究会、発達臨床分科会、発達障害分科会、性格分科会、保育分科会がある。各分科会には、学会が年間3万円の活動補助金を支給している。筆者の関連している発達障害分科会は「障害から発達へ、そして発達から障害へ」というキャッチフレーズのもとに、年3-4回の例会に、夏の合宿、発達心理学会だけでなく他の学会でのシンポジウムの開催、分科会のニューズレターの発行と様々な活動を行っている。来年の春には、今までの活動をもとにした、発達障害分科会の編集による「発達の謎」という3巻シリーズがミネルヴァ書房から出版される予定である。最近では、院生や若手研究者による「ユースの会」という勉強会ができ、例会を持って研究交流している。

また、全国に6つの地区懇話会もでき、活動をしている。

年数回のニューズレターの他に、コンピュータ・ネットワークによる月2回の研究情報ニュースを発信し、各地の研究会や講演会、出版物などの情報をアップデートに交換できるようにしており、最近では、インターネットにホームページ (<http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jsdp>) を開設した。

学会発足の経緯としては、1987年の夏に、東京で国際行動発達学会 (ISSBD) の大会があり、世界中から1000人をこえる人が集まったが、その時ボランティアとしてはたらいだ若い研究者たちが、日本の発達心理学者が研究を交流する場としての学会が欲しいと考え、それから3年余り熱心に準備して発足したものであり、初期から国際性を重視してきた。毎年夏には、海外から研究者を招き、10-20名程度の少人数による1週間のワークショップを行い、若手研究者にトレー